北海道医報　ISSN 0913-0217　2013.6.1. 第1137号　発行人　北海道医師会長　長瀬　清　発行所　北海道医師会　〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目　TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070　URL http://www.hokkaido.med.or.jp/　E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円

「私たちの未来予想図」

― 産婦人科若手医師企画シンポジウムから

情報広報部副部長　藤井　美穂

5月10日から3日間、第65回日本産婦人科学会が北大主管で開催された。6,000人の産婦人科医師が一同に会し、婦人科手術、薬物治療、周産期救急、胎児治療、生殖医療など多くの領域にわたって、シンポジウム、セミナー、一般演題セッションの中でディスカッションされた。この中で、若手医師企画によるシンポジウムについて紹介したい。

今年のテーマは、私たちの未来予想図というサブタイトルがついた「10年後の産婦人科医療」。この企画は産婦人科を選ぶ若い医師が減少し、産婦人科医療崩壊の危機を乗り切るために、次世代を担う若手産婦人科医にイニシアチブを渡して考えてもらい解決の糸口にしようと、産婦人科学会の提案で5年前に創設された。

産婦人科医療はここ10年来、社会問題になる事例が多く、これを受けて体制も変わってきた。2004年、福島県立大野病院で前置胎盤症例の帝王切開術で母体死亡があり、2年後に執刀産婦人科医師が逮捕された、あの大野病院事件があった。2006年には奈良妊婦たらい回し事件とメディアで報道された2件の事例もあった。大野病院事件では2008年に医師無罪の判決が下り、医療事故調査委員会設立の具体化など医療界を変える一歩になったが、過酷な周産期医療を選ぶ若い医師の状況はいまだ変わらない。2012年と2006年を比較した日本産婦人科医会会員の調査によれば、産婦人科医総数は888人増加しているものの、分娩施設数は2,978から2,585施設と大きく減少し、17府県では分娩施設の医師数が減少しており、産婦人科医師遍在の解消は進んでいない。また平成20年度の厚労省統計では30歳未満の産婦人科医師の73％が女性医師であり、女性医師支援を実現しなければ団塊世代産婦人科医の臨床現場からの後退を補えない現実もある。

そこで若手医師企画。10年後の近未来の産婦人科医療を5つのケース提示をしながら、産婦人科医に求められるものを討論するスタイルだった。コメンテーターの1人として参加したが、満場の会員とともに盛り上がった3時間だった。

【ケース1　外国語を駆使し診療するシャレた女性医師篇？】患者も外国人が増え、国際的にコミュニケーションをとれる医師が求められるのが10年後？さて…

【ケース2　ピルが普及し性教育を推進していく婦人科医篇】女性に偏りがちな性教育を男性にも広げ、親から子へ継承する社会になる？さて…

【ケース3　TPP参加とともに医療にも外国資本が？】シンガポールにあるRaffles Japanese Clinicの産婦人科医である鍋島医師の会場からのコメントによれば、Raffles Hospitalが大阪に参入しようとしたが、日本の医療保険のカバー率が高く、外国資本参入では採算がとれず断念した経緯があったそうだ。さて…

【ケース4　医師過剰時代においてサブスペシャリティが身を助ける？】ビルでレーザー治療を専門にする男性医師、「分娩や手術はできなくなったが、私はレーザーで左うちわの毎日、よかったよかった」さて…

【ケース5　da Vinci導入で開腹手術ができない婦人科医が？】地方の小都市病院のある日。この日は学会で診療科長も若い医師も不在、たった1人残って日常臨床をこなす中堅医師。手術日でもあるこの日の手術は、子宮全摘出術。癌家系では予防的に子宮、卵巣を摘出するのが当たり前の10年後である。中堅医師の役割は、遠隔でda Vinciを操作する県立がんセンターの医師の指示のもと、機器交換すること。順調に手術は始まったが、突然術野が出血で赤く染まった。術者は出血点を探したが、見つからない。内視鏡術野以外の出血で、開腹術で止血するしかない。執刀医から「先生、開腹に変更」中堅医は「私…私は、5年前に1例だけ開腹手術をしたっきりで、この状況下では手術する自信がありません…」執刀医、「君、患者が死ぬぞ。誰か開腹術ができる医者をつれて来い…」。結局、ここに登場したのは、検診センターで子宮癌検診のみ行なっている引退した66歳の高齢医師。さっそうと開腹での子宮全摘出術を完遂したのだった。さて…

私たちに求められる産婦人科医師像とは、幹の太い、総合力を身につけた医師であることが結論であった。モチベーションを維持することも必要であろう。しかし、患者を前に、命を助けてこその産婦人科医であり、基礎研究の経験を活かし産婦人科医療に貢献することも大きな役割である。社会のリーダーたる人格と、豊富な知識を持つ医師が社会に発信していくことが求められるという、どの診療科でも同じ若手医師企画の総括であった。仮想10年後の産婦人科医療の5つのケース中、2番目くらいが現実となればいいなと思いながら、次世代の産婦人科医たちの素晴らしい企画に拍手を送りたい。